

福山市幼保小連携教育キックオフ会議

2022(R4)5.30(月) 14:00~15:00

幼保小連携教育の推進にあたって (三好教育長)

就学前教育(遊び=学び)と小学校教育(主体的・対話的で深い学び)を虹のかけ橋でつないでいきたいという思いで、この会を設定させていただきました。

福山市幼保小連携教育は、「すべての子どもたちが、乳幼児期における子どもの自発的、創造的な遊びや体験を通した育ちと学びを基礎としながら、安心感を持って小学校生活に円滑に移行し、自己を発揮し成長していくために、就学前教育と小学校教育の連携・接続の仕組みを構築し、内容の充実を図ること」を目的としています。今日は、就学前教育と小学校教育をつないでいく仕組みをつくり、なぜ幼保小連携が必要なのかという意義をお互いに共有していくスタートの会となります。



* 福山100NEN教育 *

本市では、福山市が市制施行100周年を迎えた2016年(平成28年)に、「福山100NEN教育」を宣言しました。日々の授業を中心とした教育活動を通して、これからの社会を生きていく力「21世紀型「スキル&倫理感」」を育成し、身に付けた知識や経験を活かして行動化できる力を育てていくことをめざしています。



「福山100NEN教育」の中心には「学び」があります。「学び」とは、「勉強」「強いて勉める」ということではなく、「知りたい!」「なぜ?」というワクワク感に包まれたものと考えています。子どもたちが「面白い」と感じる「学び」をつくっていくために、「主体的・対話的で深い学び」「学びをつくる教職員研修」「多様な学びの場の提供」「元気・笑顔で学び続ける教職員」という4本の柱で、この間、取組を進めています。

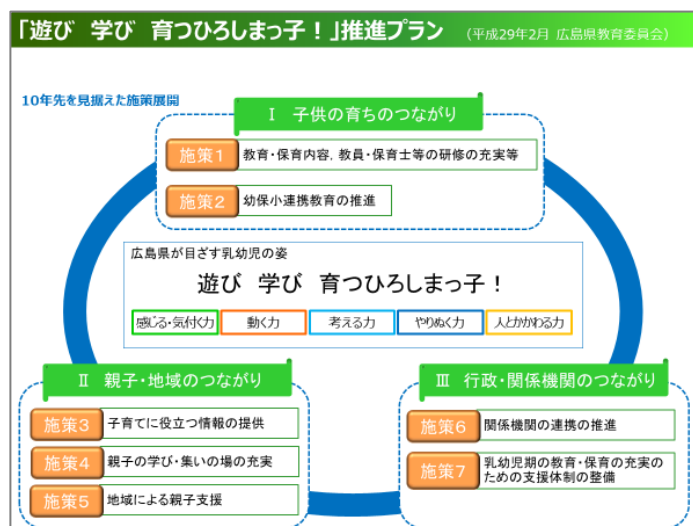
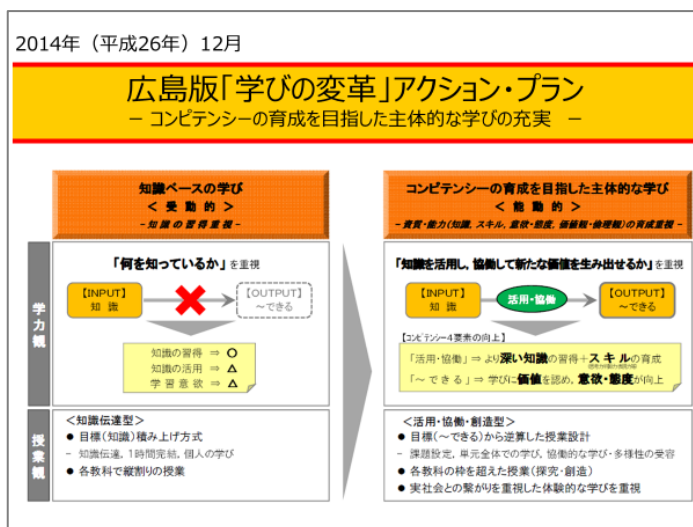
* 広島版「学びの変革」アクションプラン・「遊び学び育つひろしまっ子！」推進プラン *

「福山100NEN 教育」の考え方に立つ2年前、2014年（平成26年）に、広島県が「『学びの変革』アクションプラン」を出されました。その中で、知識の獲得を中心とした学びから、資質能力の育成を目指した主体的な学びに変えていく方針が示されました。これは、すでに小・中・高等学校でスタートしている新しい学習指導要領が求める学びを広島県として整理されたものです。

それから3年後、2017年（平成29年）に、「『遊び学び育つひろしまっ子！』推進プラン」が出されました。これは、10年先を見据えた施策で、広島県がめざす乳幼児の姿を5つの力に整理し、7つの施策を始めていきました。「『学びの変革』アクションプラン」が、義務教育から高等学校に向けてのものであるとすれば、「『遊び学び育つひろしまっ子！』推進プラン」は、その前段である就学前の学びが整理されたプランとなります。

プランの中には、「乳幼児期は、『探求の芽』を育む重要な時期」「乳幼児期の子どもにとって、『遊び』は探求の宝庫。『遊び』そのものが学び」という言葉があり、遊びの五原則が示されています。遊びを通して総合的に5つの力（「感じる・気付く力」「うごく力」「考える力」「やりぬく力」「人とのかかわる力」）を育てていくことが整理されました。

乳幼児期に、この5つの力を育むことは、小学校以降の教育の基盤となっていきます。この5つの力は、「広島版『学びの変革』アクションプラン」に示す「これからの社会で活躍するために必要な資質・能力」へとつながる力です。小学校に入ってから学ぶのではなく、そのもとが育まれる時期に、遊びを通して総合的に育てていくものであることが示されました。



遊びの五原則

(キャシー・ハーシュバセク ロバート・ゴリンコラ)

- 1 **遊び**は楽しくなければならない。
- 2 **遊び**はそれ自体が目的であるべきで、何か他の目的であってはならない。
- 3 **遊び**は遊ぶ人の自発的な選択によるものでなければならない
- 4 **遊び**は遊ぶ人が能動的に関わらなければならない。**遊ぶ**せてもらっていたら**遊び**ではない。
- 5 **遊び**は現実から離れたもので、演技のようなものである。子どもが何かの「ふり」をしていたらそれは「**遊び**」である。

* スタートカリキュラム スタートブック *

国でも、2015年（平成27年）1月に、「スタートカリキュラム スタートブック」が示されました。義務教育は、ゼロからのスタートではない、子どもたちは幼児期にたっぷり学んでいる。学びの芽生えがあることを踏まえて、義務教育をどのようにスタートするのかということが整理されました。



本市においても2020年（令和2年）、学びをつなぐカリキュラムとして「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」を作成しました。それを受けて、義務教育においても、小学校と中学校の学びをつなぐ国語、算数・数学などのカリキュラムを整理し、取組を進めています。

* 日々の授業への疑問 *

私は、これまでも時間があれば学校へ行き、子どもや先生の姿を見てきました。その中で、小学生も中学生も総じて、先生の指示を受けて、言われたことをやり、終わればじっとしてる。活き活きと学んでいるというよりも、元気がない。「今何してるの?」と聞いても、「何かよくわからないけどやってる」と答える。この状態で、子どもたちは、「学びが面白い」と感じているのかと思っていた時期があります。これまでの取組によって、学力や体力調査で改善が見られ、数値的な結果がたくさんあっただけに、余計に子どもたちの教室での姿について疑問をもちました。

ちょうどその頃、いろんな方と話をしたり、いろんな情報を受信する中で、子どもたちの姿を見て「本当にわかっているのかな」ということを思っていました。社会的にも子どもたちの読解力の問題が大きくクローズアップされていて、そのような情報とも重ね合わせながら、子どもたちの姿を見ていました。

その中で、「子どもの言語習得のためには、一方的に言葉を発するテレビに向かうのではなく、大人などとの双方向コミュニケーションが重要である」など、数々の研究報告に触れました。最近では、スマホやテレビなどで、小さい頃からいろんな情報に触れています。しかし、大人との会話で言葉を習得していくとしたとき、就学前の子どもたちの家庭環境はどうか。双方向のコミュニケーションになっているのかどうか。また、「2歳時に言葉の習得が充分にできて

日々の授業への疑問

子どもたちは
活き活きと 学んでいるか?
主体的に 学んでいるか?

学びが **面白い** と感じているか?

いる子どもは、幼稚園に入る時点で字が読めている、数の概念を理解できているなどの学習の基礎を備えることができている。」という研究報告もあります。子どもは、生活の中で、大人が話す会話を聞いたりしながら、いつの間にか言葉を自分のものにしていきます。「文字を書きなさい」と言われて書くのではなく、文字が書かれているものを見て、興味を持って書き始める。書き始めると、書き順があることに気付いたり、兄姉がやってるのを見て文字を覚えたり。そうやって言葉を獲得する環境にある子とそうでない子がいます。

「高所得層の子どもたちと低所得層の子どもたちを比べると生後最初の4年間だけで、3千万語もの『言葉のシャワー』の差がある。」という研究報告もあります。テレビから一方的に流れる言葉ではなく、家族の会話だったり、兄姉喧嘩だったり、仲裁に入る誰かの言葉だったり。言葉がシャワーのように流れる環境の中で、子どもは一つ一つ自分の言葉を手に入れていっている。このような報告は、強くインパクトがあるものでした。

* 小学校「学びづくり」フロンティア校事業 *

「福山100NEN教育」の2年目、2017年（平成29年）に、小学校入学時、すでに身に付けている力に差があることを前提に、全ての子どもたちに確かな学力を付けることを目的として、小学校「学びづくり」フロンティア校事業を始めました。

義務教育がスタートした時点で差がある。生まれた環境によってできた差を埋められないまま9年間が終わったのでは、公教育の責任を果たせないという問題意識がありました。改めて、学力の基礎となる言葉と数を子どもたちが理解・獲得していく過程を見ていきました。

小学校へ入学した時点で、言葉が読める子、計算できる子がいます。しかし、全く読めない、計算できない子もいます。子どもが言葉と数を獲得する過程を見るために、市内の小学校2校へ指導主事が毎日入り、国語と算数の授業を録画し、子どもの発言・姿を記録し続けました。これから2つの動画を紹介します。

小学校「学びづくり」フロンティア校事業

2017(H29) 福山100NEN教育 2nd year

小学校入学時、既に、身に付けている力に **差** があることを前提に、全ての子どもたちに確かな学力を付ける。

【方法】

学力の基礎となる「言葉」と「数」を理解・獲得する過程を明らかにする。

2小学校 小学校1年生（約90名）の国語科、算数科の授業から、学びの過程をエピソード記述

約900時間の授業観察

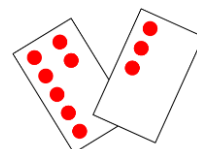
・子どものつぶやき、表情、会話、書いた文字などを記録

・録画した映像から教師の発問、子どもの反応等を文字に起こし整理



【動画1 算数「いくつといくつ」】

この動画は、赤い丸が1から9まで並んでいるカードを神経衰弱のように裏返しに並べ、2枚を表にして、お題の数になったほうが勝ちというゲームをしています。先生は1から9のカードを2組出してゲームをするよう伝えていましたが、これから見ていただく2人は、カードを1組しか出していません。お題の数は「8」です。女の子が引いたカードは「4」。さて、どうするでしょうか。



C1:「1, 2, 3, 4」

C2:「これが4じゃん。1, 2, 3, 4」

C1:「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7…ああ、だめか」

C2:「えー。なにが合うんじやろうか。1, 2, 3, 4, 5, 6」

C2:「1, 2, 3, 4, …, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7」「7か…」

C2:「これ合う？1, 2, 3, 4…8, 9だ。」「もうひとつ4がないといけんわ。」



大人であれば、「4」が出れば、「8」にするためには、もう1枚「4」がいるということがすぐわかると思います。同じ1年生の中にも、「『4』がいる」とすぐ出てくる子も当然いると思います。「8」から「4」を引いて「4」なのか、「4」に「4」を足して「8」なのか。たし算するのか、ひき算するのかわかりませんが、こうやって一生懸命探しても、「8」にならないわけです。2組カードがあれば、「4」を出して、「はいできた！」と言って終わりますが、「4」が1組だったために、何度もたし算をしています。最初からトラブルがないように確認して、環境を整えることもとても大事なことだと思います。しかし、何を足したら「8」になるのか何度も指で数える中で、「4」がいることに自分で気付く。この時間が、とても大事なのだと思います。



【動画2 国語 物語文「ゆうやけ」】

次は、国語の動画です。「ゆうやけ」という物語文で、きつねの子、くまの子、うさぎの子が仲良く遊んでいるお話です。グループごとに役割を決めて、登場人物になりきって動作化しています。読んだだけでは、なかなか言葉の意味がわからないから、小学校では1年生に限らず、物語を動作化したり、劇にしたりしています。国語に限らず算数においても、並んで何番目、何人のグループがいくつあるというような問題で動作化することもあります。

この動画は、単元の終わりの時期で、みんな文章をスラスラと読むことはできていました。

C1:「きつねの子は、両手をポケットにつっこんで、…」(ポケットに手をつっこむ)

「にっこりしました。」(にっこりする)

C2:「いいよ。とってもいい。」

C1:「くまの子が言うと、うさぎの子もうなずきました。」

C2:(きつね役の子に近づく) →→→→→

(C3の子に「うなずけよ」と促す)

C3:(C2と同じ動作はしない)

C2:「うなずくって、どういうこと？」

C1・3:「うなずくって、こういうこと！」(二人でうなずく動作をする)



「うなづく」という言葉がどういう動作なのかということを初めて知った場面です。この動画は、いろんな研修で使いました。教えてわかっているように見えてもわかってない。読めていても意味が理解できてない。動作化が活動として終わるのではなく、どういう価値や意味があるのかということを伝えていきました。



「うなづく」って
ということ？



「うなづく」って
ということ！

* 子どもが学ぶ過程 → 教師の役割 *

子どもが言葉と数を獲得していく過程を見ていく中で、明らかになったことは、「できる」と「分かる・理解する」ことは必ずしも同じではないこと。一人一人、「分かる・理解する」過程や方法、スピードは異なること。言葉と数を獲得していくには、対話しながら動きながらということが必要だということです。そこで、「学びが面白い」ということは、ただ表面的な「面白い」ではなく、「知りたい」「わからない」「できるようになりたい」という内発的動機付けに基づくものだとして整理しました。そして、子どもたちが主体的・対話的に深く学ぶための教師の役割は、ファシリテーター、サポーター、アナリストであること。教えることはしっかり教えて、子どもに任せっきりではなく、しっかりと聴いて状況を見ながら、どのようにファシリテーター、サポーター、アナリストとしての役割を果たしていくか。これまで計画・予定通りにやることが、いい授業だと言われていました。そこから子どもの発言など、起こっていることの中で、臨機応変に組み替えたりすることを大事にしていくようにしました。また、

「これが素晴らしい」といった既成概念、価値観の問い直しもしていきました。例えば、ある言動に対して「素晴らしい」と褒めると、その子は嬉しいけれども、全然違う言動をしている子は、「違うんだ」と思ってしまいます。肯定的な評価をどこでどう入れるかということも考えないといけない。価値が一つ、正解が一つのことであるならいいけれど、そうでないことは、たくさんあります。評価の言葉が、周りの思考を止めたり、他の考えを持つ人の否定になったりすることがあるということを問い直ししていきました。

子どもが学ぶ過程 → 教師の役割

子どもたちが主体的・対話的に深く学ぶための教師の役割は？

➡ ファシリテーター、サポーター、アナリスト

- しっかりと教えること。
- 子どもに任せ、粘り強く答えを見つけ出す場と時間を確保すること。
- 友達との対話を通して理解を深めること。



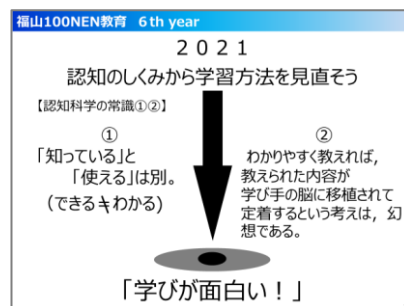
* 福山100NEN教育 6th year *

昨年度から、改めて「認知の仕組みから学習方法を見直す」ことに取り組んでいます。認知科学の常識として整理されていることの中から二つ挙げています。『知っている』と『使える』は

別。」「わかりやすく教えれば、教えた内容が学び手の脳に移植されて定着するという考えは、幻想である。」

学んだことが、知識となって使えているのか、行動化できるのか、新たな価値を創造できるのか。

「リアル&デジタル『学びが面白い!』の深化」をテーマに掲げ、今年度も継続して取組を続けています。



* 幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」 *

幼稚園教育要領や小学校学習指導要領の総則においても、幼児期の終わりまでに育ってほしい力や、幼稚園で付けている力を踏まえて小学校につなげていくことが、それぞれ明記されています。幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」として、次のように整理されています。

- (1) 健康な心と体
- (2) 自立心
- (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え
- (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 量・図形、文字等への関心・感覚
- (9) 言葉による伝え合い
- (10) 豊かな感性と表現

* 広島県の15歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力 *

広島県では、義務教育の終わり15歳の生徒に身に付けておいてほしい力として、「自己を認識する力」「自分の人生を選択する力」「表現する力」を設定しています。これは、ものすごく大きな力だと思います。「これらの力は、小学校段階から（強いて言えば乳幼児期から）、自分の考えをしっかりと持たせ、先生や友達に心を開いて何でも話すこと（自己開示）ができる環境の中で、意図的・計画的に育む。」と示されています。

広島県の15歳の生徒に身に付けておいてもらいたい力（広島県教育委員会）

自己を認識する力
自分は何が好きなのか、自分はどのような人間なのか、など、自分自身のことを理解することができる力

自分の人生を選択する力
自分の将来の夢や目標、自分がやりたいことなどについて、自分で考え、選択し、自分の意志で決めることができる力

表現する力
自分自身のこと、自分の考えや思いを、相手に理解してもらえるように工夫しながら伝えることができる力

これらの力は、小学校段階から（強いて言えば乳幼児期から）、自分の考えをしっかりと持たせ、先生や友達に心を開いて何でも話すこと（自己開示）ができる環境の中で、意図的・計画的に育む。

これらの力が、急に付くものではないということは、誰しも理解できると思います。「強いて言えば乳幼児期から」の「強いて言えば」ということが、余分だと思うくらい乳幼児期からしっかりと育むことが大事だと思います。急に「考えなさい」「自分で選びなさい」と言っても、選ばせんから。乳幼児期から、2つのものから食べたいものを選ぶ、やりたいことをする、そういう選択をしていく。その中で、うれしかったことや嫌だったことを表現していくからこそ、15歳の出口で、力が付いていくのだと思います。入試の直前に、傾向と対策でトレーニングをするということではないと理解する必要があると思います。

改めて、福山市幼保小教育が連携して、しっかりと虹のかけ橋を作り、つないでいく。校長先生、施設長の先生方、子どもたちに関わるすべての人が、一緒に頑張っていく組織を作り、取組を進めていきたいと思っています。すべては子どもたちのために、ともに頑張っていきましょう。

アドバイザー紹介及び挨拶

* 安田女子・安田女子短期大学 朝倉敦 客員教授 *

この度は、福山市の幼保小連携教育に関わる
ことになり、大変うれしく思っております。
保育教育と学校教育の連携接続は、子ども一
人一人の成長の観点から考えて、非常に大事
な営みです。加えて今日では、急速なデジタル
化の進行、2年以上にわたるコロナ禍によって、幼保小連携接続は、一層重要になってきてい
ると感じます。

A I の時代になってきて、問いかければすぐ情報を得ることができます。そのような時代において、「知識」をどのように考えたらいいのか。子どもたちにどのような資質能力を育てていけばいいのか。子どもたちはそもそもどのように育つのか。これからの教育においては、このようなことが大きなテーマとなり、決して逃れることはできません。大きく言えば、人類が始まって以来の大きな変革期に直面していると思います。マスク着用、オンライン授業など、今までそれぞれの経験の中でイメージしてきた就学前保育・教育や学校教育とは違う子どもたちの姿が存在しています。もはや、連携接続なしに、よりよい保育・教育を展開することはできません。さらには、限られた組織だけでは取り組むことができない状況でもあります。これからは、いろいろな組織が体制を組んで、情報を共有しながら、新しいものを作っていくスタイルが求められてきます。様々な課題もありますが、子どもたち一人一人のよりよい成長を願いつつ、一緒に取り組んで参りましょう。

専門：生活科・総合的な学習の授業論
日本生活科・総合的な学習教育学会会長
初等教育カリキュラム学会会長
広島県「遊び 学び 育つひろしまっ子！」推進プラン
策定（有識者）
広島県乳幼児教育支援センター発行「NEWS LETTER」へ
記事掲載
2019年（令和元年） 福山市保幼合同研修会 講師



* 慶應義塾大学環境情報学部 今井むつみ 教授 *

幼保小をつなぐ連携協議会が発足して、
こんなにうれしいことはありません。これ
まで、広島県の幼児・義務教育にアドバイザー
として関わらせていただき、幼保小連携
の大切さを何年も言い続けてきました。

幼児の言語発達、概念発達という分野の研究から考えると、本当に当たり前のことです。小学校で楽しく学ぶためには、遊びや生活の中で、子どもたちが自分で育んだ言葉の力、知識を豊かに持っていることが大事です。幼児期の遊びを通じて、数や量に触れ、考える機会があると、子どもは興味を持ってワクワクしながら、学校の算数、理科という教科に臨むことができます。

私は、小学生のつまずきの原因を明らかにするため、広島県教委と一緒に「ことばの達人」「考える達人」調査を開発しました。実施にあたっては、福山市教委にもお世話になり、小学生

研究内容：認知科学、認知心理学、発達心理学、言語心理学
広島県「遊び学び育つひろしまっ子！」推進プラン 策定（有識者）
広島県教委・福山市教委とともに「ことばのたつじん」
「かんがえるたつじん」テストの開発
書籍「算数文章題が解けない子供たちーことば・思考の
ちからと学力不振」（6月出版予定）
福山100NEN教育応援団の一人
福山教育フォーラム 4回講演



が言葉と数をどのように理解しているのか、衝撃の結果を得ることができました。

小学校の先生方は、子どもが、「1週間後」「1週間前」など、時間の言葉を理解するのに苦労してるとは、あまり思われたいのではないのでしょうか。学校の先生だけではなく、保護者の方もそう思われていると思います。しかし、今回の調査の結果で、子どもたちは、時間の言葉にすごく苦労していることがわかりました。

例えば、カレンダーを見せて、

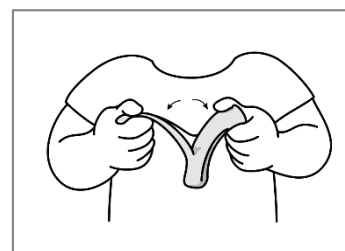
「今日は3月14日です。1週間後にお誕生会があります。

1週間後のお誕生会の日に、丸をつけてください。」

という問題を出したときに、1週間後に丸をつけられた子は、2年生で半分ぐらいしかいなかったんです。「前」と「後」が混乱して、3月7日に丸をつけている子もいました。「1週間」という言葉がわかっていない子どももいました。

3月						
月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

時間の言葉だけでなく、基本的な動詞の使い方も聞き間違えて覚えていたり、似ている言葉と混同したりしていました。例えば、チーズを割いている絵を見て、何をしているかを答える問題で、「チーズをとろけさせています」と答えた子もいました。おそらく動詞とよく使われる名詞との連想で、「チーズ」だから「とろけさせる」という発想をしているのだと思います。子どもは本当に様々な考え方をしながら、自分で言葉の意味を覚えていきます。子どもは、非常に素晴らしい、学習する能力、自分で修正する能力を持っています。



先ほど三好教育長が、「どんなに整理された内容をどんなにわかりやすく教えても、子どもの脳に移植できるわけではない」と言われていました。まさにその通りです。今、個別最適化した学びが大事だと言われています。それは、子どもが何を考えているのか、どういうことにつまづいているのかということを大事にすることだと思います。子どものつまづきは、子どもが自分で考えている証拠です。それを受けとめて、解きほぐしながらも、さらに自分で考えるように導いていただきたいと思います。それは決してやさしいことではありません。

子どもの考えを一人一人理解するのですから、先生として熟練する必要があります。これまで、福山市の多くの先生方と交流してきた経験から、先生方は、十分にそれができる資質・スキルを持っておられると私は確信しています。

この幼保小連携教育の推進によって、福山市の子どもたちが楽しく生き生きと学び、「学びが面白い」という気持ちをもって、これからの広島県、日本を担う人材に育っていくことが、私の強い願いです。

説明「7月までの取組」

* 幼保小連携協議会の設置 *

就学前教育と小学校教育の連携・接続の仕組みをつくり、内容の充実を図るために、連携校区を編成しました。→→→
今までの連携状況や2021年度末小学校を対象とした連携状況に関するアンケート、園所の所在地がある校区や、連携人数の軽重をもとに、案を作成しています。

校区	【幼保小連携協議会】(案)	校区	【幼保小連携協議会】(案)
1 東	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	10 西	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
2 南	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	11 東	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
3 北	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	12 西	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
4 南	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	13 東	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
5 北	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	14 西	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
6 南	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	15 東	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
7 北	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	16 西	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
8 南	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	17 東	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園
9 北	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園	18 西	公立幼稚園 ●私立幼稚園 ●公立保育園 ●私立保育園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園 ●公立認定こども園 ●私立認定こども園

この案では、1つの園所が1つの連絡協議会に所属するようにしていますが、1つの園所が、複数の連絡協議会に所属することも可能です。幼保小連絡協議会は、校長、施設長、連携担当者で構成し、授業・保育参観や交流・協議、指導要録を活用した連携・接続などの計画を立て、取組を進めていきます。

* 連携担当者の選出 *

各学校、各施設で1名、選出してください。連携担当者は、幼保小連携の推進やカリキュラムの開発等を中心となって行います。本会議終了後、アンケートに回答できるURLを送付します。その中で、連携校区案に対するご意見・ご要望や、選出した連携担当教員をお知らせください。集約後、決定通知を送付させていただきます。

* パイロット校区の役割 *

目的は、就学前教育と学校教育との連携・接続を発展させ、学びの連続性を確保するカリキュラムをモデル的に開発・実践し、その過程や成果を全市に発信することです。

主な取組は、

- ・ 計画的な幼保小連携協議会の開催及び連携内容や方法等についての研究
- ・ 生活科を中心とした合科的・関連的なカリキュラムや弾力的な時間割の研究
- ・ 遊びや体験を通して教科横断的に言葉や数の概念を獲得するカリキュラムの研究 です。

指定校は、光小学校と緑丘小学校です。

光小の連携校区にある霞小、西保育所、野上保育所、天使幼稚園、草戸こども園、

緑丘小の連携校区にある緑丘幼稚園、福山りじょう幼稚園も一緒に研究を進めていきます。

コラボレーターとして、元樹徳小学校長 筒井徳子学校指導員、元神辺小学校長 萩原由紀子学校指導員に関わっていただきながら、研究を進めていきます。

これから、皆様のお力添えをいただきながら、学びづくり課・保育指導課、保育施設課と連携しながら、保幼小連携に向けた取組を進めていきます。皆さん、一緒に頑張ってください。